令和５年度　第３回京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会会議録

１　開催日時：令和５年７月１０日（月）１５時００分～１７時３０分

２　開催場所：京丹後市役所大宮庁舎　第２・３会議室

３　出席者：

浅井　智美　委員

井上　知英　委員

今度　義則　委員

岩本　　悠　委員

岡田　泰行　委員

荻　　弦太　委員

古賀　稔邦　委員

田茂井 勇人　委員

竺沙　知章　委員

長井　　悠　委員

中川　　哲　委員

牧野　光朗　委員

木島　里江　委員代理

塩川　達大　オブザーバー

田中　　努　オブザーバー

社会福祉法人みねやま福祉会　理事長　櫛田　啓　氏

（欠席者）

岩本　　悠　委員

髙橋　一也　委員

事務局：

京丹後市副市長　濵　健志朗

京丹後市教育委員会　教育長　松本　明彦

京丹後市教育委員会事務局　教育次長　引野　雅文

京丹後市教育委員会事務局　学校教育課長　川村　義輝

京丹後市教育委員会事務局　教育総務課長　西村　隆

4　議　　事

（1）　産業界との連携について

（2）　探究的な学びの在り方について

（3）　中間まとめに向けた基本的な考え方（案）

（4）　その他

5　公開又は非公開の別　　公開

6　傍聴人　　1名

7　要旨

松本教育長：第3回の京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会にご出席いただきまして本当にありがとうございます。とりわけ学校関係の委員の皆様におかれましては、学期末の大変忙しい時期にご出席いただきましたことを心より御礼申し上げます。またその他の委員の皆さんにつきましても本当にお忙しい中、3回目の会議にご出席いただきました。心からお礼申し上げます。

さてこの検討会でもいよいよ3回目ということで、早いもので準備会も含めますと5回の検討を重ねてきているという状況となっております。皆様方から多くの意見をいただきまして、京丹後市で育てるべき子どもたちの資質能力というところについては、はっきりと方向性が出てきたのではないかと考えているところですが、この資質能力をどのように、どんな場面で、という具体的な部分を検討いただく時期に来ているのではと思っております。今日

は、教育と産業界の連携についてということで櫛田様の方からも発表いただきますし、探究型の学習ということではトロント大学の木島先生の方にもご発表いただきながら、皆さんでそうした部分についての理解を深めていけたらと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。いよいよ、中間まとめに向けた基本的な考え方もまとめていきたいというふうに思いますので、今日はじっくりと時間をとっておりますので、皆様の忌憚のないご意見をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（1）産業界との連携について

櫛　田　氏　：皆さんこんにちは。講師みたいな形で進めさせていただくんですけど、一市民としての意見ですので、あまり参考にならないかもしれませんけれども、私が考えている教育というかこれからの産業のあり方とか、地域のあり方について少しお話させていただけたらなと思っています。当社会福祉法人でも人材育成、人材確保に力入れているので、新任のスタッフには、この研修を受けてもらったりしています。もしかしたら既にわかっているということだったりとか、あんまり参考にならないとかあるかもしれませんが、1 度、少し話をさせていただけたらと思っています。時代は移り変わる（進化する）というところですけども、これ写真ではですねニューヨークの五番街ストリート、ほぼ同じ角度からとらえている写真ですけれども、左側は、馬車の中に車が 1 台写っているらしいです。馬車が基本的な交通手段であった時代から、時代が変わって右側、車の中に場所が 1 台だけしかない時代だということなんですけども、これ左側が 1900 年に取られた写真なんです。右側が 1913 年、たかだか 10 数年で圧倒的馬車の時代から圧倒的車社会へと世の中は変化していると。もう少し調べてみると、映っている車は T 型フォードですけども、T 型フォードが発売されたのは 1908 年。ということはですね、たかだか 5 年で圧倒的馬車の時代から圧倒的車社会へと世の中は変化しているというようなことで、要は時代は急激に変化するぞっていうことですね。さらにですね時代は元に戻らないと。今から車買い換えるときに馬車にしようかなって思う人多分いないと思います。これからは例えば電気自動車とかが主流になってくると、ガソリンか…ということにもなってきて、時代が元に戻るということはない。

ソフトバンクの孫さんが世界のトップ経営者たちとの議論の中で、よく使われるスライドなんですけども、今まさに100年に1度の大変革期にあるんだと。これはまた別の言い方で言うと、VUCAの時代と言われて、変動性、不確実性、複雑性、曖昧性それぞれ英語表記した頭文字を取って、VUCAの時代というふうに言われている時代だそうですが、これは要するに何かというと、日本語で言うと予測不可能な時代とか、正解のない時代だというふうに言われています。もう少し時代背景とらえていくと、1990年代にこの大きな時代の転換期が来たと言うふうに言われていて、それは一体何かというとバブル経済の崩壊と、人口問題で人口がボーナス期からオーナス期へと変わったと。グラフを見てもらうと結構わかりやすいんですけども、ちょうど左側が人口ボーナス期で右側が人口オーナス期。1990年代中頃で人口ボーナス期からオーナス期へ変わったんだということを認識していただいた上で、次のスライドに行くんですけども、要は人口ボーナス期に経済発展しやすい働き方っていうのがまとめられてます。これはですねなるべく男性が働いた方がよかったんですね。これは重工業の比率が高いので、筋肉が多い方が適している業務が多かったということ。また、なるべく長時間働くのがよかったということ。大量生産大量消費の時代ですから、早く安く大量に作って勝つためには時間が成果に直結すると。この頃の流行語大賞が「24時間働けますか」という、今聞くと、馬鹿じゃないのって、若い子たちは言われるんじゃないかなというぐらいでも当時は長い時間働けばよかったっていうんですね。なるべく同じ条件の人をそろえて、ブルーカラーホワイトカラーとか言われたりしますけども、均一なものをたくさん提供することで市場ニーズを満たせるため、労働力余っていたと。わかりやすい一定条件で足切りをするのが納得させやすかったと。転勤や残業で振り落として残るために必死になることで、忠誠心を高める手法が経営者としては有効であったということですね。労働者は代えが効く、立場が弱く、一律管理することができるというような時代であった。

でも、人口オーナス期に経済発展しやすい働き方は大きく変わってきました。経済学的なところでまとめられたスライドを参考にしています。ちょっと言葉が悪かったりしますがあくまでも参考にして出させてもらってますんで、

ご理解いただけたらと思いますが。人口オーナス期に経済発展しやすい働き方は、なるべく男女ともに働く多様性と言われたりしますが、頭脳労働の比率が高いかつ労働力が足りないので使える労働力はフル活用する。またなるべく短時間で働いた方がいいということですね、時間当たりの費用が高騰している。日本人の時給は中国人の 8 倍インド人の 9 倍なので、体力に任せて働かせるのではなく、短時間で成果を出すくせを徹底的にトレーニングしないと利益が出ない。また、なるべく違う条件の人をそろえた方がいいと。均一なものに飽きている市場なので、常に違う価値を短いサイクルで提供する必要がありますよと。また労働力が足りないので転勤や残業の可否で足切りをすると、介護する男性も皆振り落とされ、育児、介護難病障害などは労働する上での障壁ではないという、労働環境の整備が重要っていうふうに出てきている。ここまできて、私も経営者として、どちらかというと今自分がやってきている組織っていうのは、比較的人口ボーナス期に整備された組織体制が根強く残っているなっていう感覚はあって、でも成果が出ないというふうになると大幅に変えていかなきゃいけない。じゃあ変えていこうと思ったときに何が起きるかっていうと、現場からそんなの無理という声があがるんですね。いわゆる古き成功体験に足を引っ張られてしまう環境があって、その中でこれからの時代に即した働き方とは何なのかっていうようなことをですね、改めて会社に入ってから社員を教育しなければならない時代になってきたと。でもその社員も多くはその古い人口ボーナス期の価値に縛られた、引っ張られた形での価値観を持って入社してくる方が結構多いんですね、今現状。その方々の価値観を変えるという作業はとてつもなく労力のいることです。この前も私は社員の研修で講義をやってきたんですけども、もう徹底的にそれを言い続けていきます。これ、ドラッカーがこんなことを言っています。「20 世紀における最も価値ある資産は生産設備だった。他方 21 世紀の組織における最も価値ある資産は、知識労働者であり彼らの生産性である」と。労働生産性とか言われたりしますが、20 世紀の業は製造業における肉体労働生産性を 50 倍に上げたことだと。続く 21 世紀に期待される事業は、知識労働の生産性を同じように大幅に上げることである。知識労働なんでやっぱり個人の考える力はとても重要になってくるんですね。大切なものがマシ

ーンから人へ変わっていったということが明らかになっています。そんな中でもう少しだけ時代背景でいくと新しい時代の「優秀」とは何か。最近はうちの法人でも定義しているんですけど、新しい時代の優秀な人材とは何かというと、記憶力より検索力だと。昔はいろんな知識がある人が優秀だって言われましたが、正直スマホには勝てないと思うんです。おかしいなと思ったときにすぐ調べる力がないと駄目だという話です。さらには常識より非常識だと。こうあるべきだとかっていう常識に凝り固まるよりは、これからどうすればいいかって新しい道を開拓していくような方。非常識という言い方で定義が正しいかどうかあれですけども常識より非常識を大切にしようと。さらに思考力より行動力。考える時間も大切なんですが、やっぱり実行すると、ああだこうだやっていてもなかなか先が見えないので、まずやってみようみたいなその行動力っていうところですね。さらには同調よりも個性というところで、多様性のある組織を作っていくんだということで、石垣のようなチームを作るとかって言いますが、いろんなごつごつした、形が違うものを積み上げていってより強固な土台になっていくというような形で、同じような人よりも、多様性のある人材を集めた方が、より強い組織になるんだというようなことを言っています。こういったことを言った時に、それでもやっぱり難しいじゃないですか。私がいつも言うのは、あるべき論から思考を開放しようと。これまでの型にとらわれない型破りな発想をしていかなければ、この地域で生き残っていくことは困難だっていうようなことを、社員には教育をしているわけであります。

そんな中で今の日本の現状を実際に見てみるとどうかというと、日本の経済成長率や賃金の伸びなんてのはもうほぼほぼゼロに近いですよね。世界各国が成長していってもかかわらず日本の成長は停滞してしまっているということが明らかだということです。これ日経新聞の記事から取ってきた資料ですけども、例えば経済成長率や賃金の伸びなどの労働生産性も、世界と比べたら平均よりも下ですし、先進国と比べたら大幅に差をつけられてしまっていると。所得格差とか貧困とかっていうところも、赤が優秀、青が世界平均から劣っているっていうグラフになりますが、日本が世界で戦えるのは、健康寿命と治安と失業率の低さっていうことぐらいで、あとはほとんど青なんで

す。これをもっと何とか考えないといけないんじゃないかと、何とかしていかないといけないっていうときに、僕は教育がものすごく重要になってくるんじゃないかなというふうに思っていて、今は社員を教育することにものすごく力を入れています。男女平等のジェンダーギャップ指数なんていったらもう、日本は先進国の中でもかなり低い方です。さらに幸福度、日本人の幸福度はって言って一応このWORLD HAPPINESS REPORT 2023を見てみるとですね、1位はフィンランドなんですけど、もちろん10位以内に日本が入ってくることはなく、先進国として米国、ドイツ、英国、フランスが大体20位程度で入ってくるんですけど日本どこなのってなったらですね、47位ってめちゃくちゃ低いんですよね。こういった状況がある。さらにこれは世界の18歳への自分自身についてのアンケート調査の中で、自分を大人だと思う日本人の割合が29.1%。世界各国から比べると圧倒的に低いです。また自分が社会の一員という認識も、お隣韓国でも70%超えているのに、日本は半分もいかないと。将来夢を持っているかという項目で何とか半分を超えたものの 60%。世界各国から大きくポイント下回っています。自分で国や社会を変えられると思うかっていう項目は18.3%。はっきり言ってほとんど変えられると思っていませんね。自分の国に解決したい課題があるか、社会課題があるかっていうところに対しても半数以下。そしてその社会課題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論しているかというと、半数以下どころか30%を下回っているということで、世界との大幅なギャップを感じております。

そんな中で京丹後でも私が今所属させてもらっています、丹後子育ちサポート協議会でも高校生の意識調査アンケートを先ほどの日本財団のアンケートになぞったような形で取らせていただきました。昨年のアンケートがインターネットでも公開されております。それを見てみると、あなた自身について大人だと思うかに対して、はいと答えた人は 19.8%。日本財団の調査では29.1%なんで全国的にはやや低いと思いますが、将来夢を持っている人の割合は75.5%で結構多くの子どもが持ってくれているので、これは、全国平均60%よりも多い高い状態で良いのかなと思います。次に、自分は丹後地域を支える一員だと思うかというのに対して、はいと答えた人は半数以下の48%。全国平均は44.8%なので、ほぼ変わらないかなと思います。右側の丹後地域

に解決したい課題があるかについては60%を超えています。全国では46%と半数以下に対して、70%近い数値なので、丹後地域の高校生は比較的課題解決をしたいという、課題を認識しているということが、このアンケート結果からわかってくると思います。どんな課題かというので、一番多いのは行きたい店や施設がない、交通が不便とかがあります。右側に行くと丹後地域の課題について家族や友人と話すことがありますかという問いに対しては、はいと答えたのが34.9%。ほとんどの人がしゃべっていないということですね。続いて、ここからが今日の重要なポイントかなと思いますが、丹後地域をより良くできると思いますかという問いに対しては、はいが62%で半数超えているんです。これはいいことだと思います。で、丹後のこと好きですかという問いには、はいが多くて、これまでの丹後学とかの教育が、郷土愛を育むっていう教育に対してはすごく成果があったんじゃないかなというのが、このアンケート調査からは見てとれます。だからこそ丹後をより良くできるかっていうことで肯定的な回答が多いのかなと思う反面、丹後地域の将来についてどう思っていますかっていうのに対し、良くできると思うが60%超えているのに、良くなるは16.6%でめちゃくちゃ低いんですよ。良くできると思っているのに、将来良くなるかどうかという問いに良くなると答えた人は16%しかいなくて、どちらかというと悪くなるとか、変わらないとかわからないっていうのが大半。これすごく僕は疑問に思う数字だなと思っています。次に、丹後地域は好きですかに対しては、好きが圧倒的に多いんですね。どちらかといえば好きを合わせると90%ぐらいいます。だからすごく郷土愛育めていると思うんです。でも、そんな大好きなまちに住みたいですかというと、住みたい人は半数以下になるんですよ。どういうことだと。大好きなのに、好きなまちなのに住みたくないという相反する答え。丹後を良くできると思っているのに良くなるという人は16%しかいないし、丹後を好きなんだけど住みたくない。これは何でこんなことになるんだろうなと思っています。丹後地域で働きたいですかという問いに、働きたい・どちらかといえば働きたいと答えているのも、37%しかいない。一方、将来丹後地域とどのくらい関わっていきたいですかっていう問いに対しては、できるだけ関わりたいってどういうことかと。関わりたいと思っている人が60%近くいるんだったら、

帰ってきて働けばいい、関わればいいのにって話なんですが、働きたい人は少ないんです。

好きだけど住みたくない。関わりたいけど働きたくないみたいに相反する回答になっている。好きなんだったら住めばいいし、関わりたいんだったら働けばいいと思うんですよ。でもそうはならない。全く逆の回答になっているのは、発想が受動的で全然主体性が育ってないんじゃないかと。要は良くなると思うけど誰かが良くしてくれるみたいな。この先このまちはどうなるんだろうみたいな他人ごとで、自分がどうしようっていう主体性のある考え方、思考が育ってないんじゃないかなというのが、すごく危惧されるところであります。学んだことを社会に出てから実践するという、僕らもずっと教えられてきて、実際そうだと思いますが、これからの時代は、学んだことが将来に出て初めて活用できるじゃなくて、もう即それがあなたの力でこのまち変えられるんだよっていうことを、どう教えていくかというと、即実践だと思うんですね。即実践できるような環境を作っていって、自分でまちをより良くする活動をすることで、将来僕は丹後に帰ってきて、こういう仕事するんだという認識に繋がっていくんじゃないかなと思っています。そのためには、学校だけじゃなく企業が体験のフィールドを開放する。例えば福祉だったら、将来社会福祉士の免許を取ってから福祉やりますとかじゃなくて、小さいうちから福祉の仕事に関わっていく体験をしていくということですね。また、ものづくりなどの体験のフィールドをどんどん開放して、我々が真剣に取り組んでいることを一緒に真剣に取り組むみたいな関わりをすること。お客さんのように体験的に来ましたとかじゃなくて本気で一緒にやっていこうと。イノベーション一緒に起こそうぜくらいの勢いで、子どもたちと経験してやっていけたらいいんじゃないかなと思っています。試行錯誤のプロセスを体験できると、より良いと思います。子どもたちの創造性を耕す教育っていうのが、僕は大事だと思います。最近中学校でもよく講演させもらいますけど絶対言いますもんね。仕事がないから帰ってこないじゃなくて、仕事ななんて自分で作るものだから、これからの時代はと。その作るという思考がどれだけ学生時代に身につくかだと思います。東京の高校生に、何かそれぐらい考えてるんだったら、起業すればいいじゃんって言ったら「起業するのは簡

単なんです。でもその作った会社が社会にどんな影響を及ぼすかってことが大事なんです」って答えてくるんですよ。そういうことなんです。クリエイティビティがあるから、解決したい課題があったらこうやったら解決できるっていう思考が働く。そうすれば今みたいに、誰かが良くしてくれるじゃなくて、俺が良くする私が良くするっていう思考に変わっていく。企業は常にこれをやり続けているんです。うちの会社でも先ほどの研修をずっとやり続けるみたいに、常に新しい価値を生み出し続けて、世の中で刺さる企画って何なんだろうかっていうのを、考えて今やっています。そういった企業の思考のプロセスに子どもたちが触れて、クリエイティビティを耕していくっていうことが大切なんじゃないかなと思っています。ぜひ丹後はどうなるっていう受け身な姿勢から丹後をどうするっていう主体性のある姿勢に子どもたちの思考を変えていかないといけない。そういう教育をどう我々が作っていけるかっていうことはとても重要なんじゃないかなと思っています。子どもの教育を学校だけに任せる時代はもう終わったと思っています。学校では、確かに学力を鍛えるっていうことは教えてもらっていいと思いますが、そういったゼロから一を作るようなクリエイティビティっていうのはまさに企業が日々の企業努力の中でやっているわけですから、フィールドを子どもたちに開放して、もっと積極的に企業が学校教育に連携して子どもたちの教育に協力するということですね。

最後になりますが僕自身は、子どもたちによく言うのは、これからの時代は、例えば国際政治的なものはいろいろ難しくなってくると思う。でも、君たちの時代はもう心の国境はなくなるはずだと。だから、外国人と働くのは当たり前だし海外に出張するのも当たり前な時代になってくると。海外と繋がっていくグローバルな働き方って当たり前になると思っている中で、子どもたちにそういった異文化に触れる体験をさせてやりたい。じゃあ海外留学どうするか、お金かかるじゃんって言われるんですけど、経済的に裕福な子どもたちだけが海外留学できるんじゃなくて、お金がない子どもたちでも学ぶ意欲のある子どもが海外に行けるようにするために、例えば企業が連携してそういう基金を作るとかっていうのを、実は仙台の学校法人さんですでに実施されているんですね。そういったふうにまち全体で子どもの教育にコミット

する地域にしていくことができないと、特にこんな東京から一番遠いまちだと言われているような、この京丹後のまちがこれから更なる発展を遂げるには非常に難しいんじゃないかなと思っていますので、全国や世界に誇れるような教育の進んだまちになることを、私は本当に心から願っていますし、私もそこにコミットできるように、我々みねやま福祉会も貢献できるように頑張りたいなと思っています。これを押し付けるわけではなく、私は日々そう思っていますということで、私からの説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

座　　長：ありがとうございました。産業界との連携がテーマで、学校で終わるだけじゃなくて、地域の、特に産業界も教育にコミットする必要があるとおっしゃっていただきましたので、まずは今日ご出席の地域の産業界の皆さんからも、どのように今のお話をお聞きになられたか。感想でも結構ですし、ご意見をいただければありがたいんですけども、いかがでしょうか。

委　　員：僕も同じように、この場でいつも言わせてもらっているんですが、グローバルな子どもたちが 1 人でも増えていくっていうことが地域を盛り上げていってくれるのかなと思っていますので。これだけ人口も減っていけば、これから多種多様な、当然海外からの労働力も含めてでしょうし、いろんなことが考えられると思いますので、まずアイデンティティを持って、積極的に関わっていくような人たちが、1 人でも多く出てくるっていうのがこの地域の力になっていくと思っていますので、大変参考になりました。ありがとうございます。

委　　員：非常に参考になりました。ありがとうございました。我々産業界ものづくりの立場からもう、いろいろためになるお話が聞けて大変参考になりました。我々は地元の高校だったり中学校だったり、職場体験でしたり、またデュアルシステムとか、実際に学生さんに企業に来ていただいて、体験していただくっていうことは、協力を大分させていただいているかなと思っています。先ほどお話ありましたけど受動的といいますかインプットはかなり、学生さんはできていると思っています。その点については、京丹後市は結構先端を行っているんではないかなあと、他の地域に比べても、結構活発的に連携がとれている地域ではないかと個人的には思っています。さらにまた突っ込ん

で、学生の力を伸ばそうと思ったら逆に、アウトプットのところですよね。学生さんたちが何かを作りたいとか、何かを表現したいとか、小学生でもいいですけど、こういうことをやってみたいっていうのをどれだけ、我々産業界がサポートできるか、これに尽きるかなと思っておりまして、例えばものづくりでしたら、こういうものを作ってみたいってなったときに、学校の設備だけでは無理だと。その際に我々企業の方にお声がけいただいたら、こういう機会がありますよとか、エンジニアを派遣してこういうサポートができますよとか、何か現実的なことができるんじゃないかと感じております。子どもたちのアイディアや突拍子もないことがあると思うんですが、それを楽しみながら産業界も連携して何かできればなと考えております。

委　　員：参考になるお話ありがとうございました。私の周りは、小さな個人事業主の方だとか小規模の企業の方が多いので、さっきおっしゃっていたような高校と連携してというのがなかなか難しい人たちも多いんですけど。受動的なお子さんが多いみたいで、言われたことしかできなかったりとか、自発的にこうやっていこうとかいう発想にならない人が多くて困っている方もたくさんいらっしゃる。ただ、主体性を持って欲しいって思うのが、こっちの押し付けなのか、子どもたち、若い人達は、言われてやるのが楽でいいわって、本人はそれが幸せって思っているのかもしれないので、雇用する側とのギャップがどんどん大きくなっているなと感じました。

委　　員：私はこの地域出身ではなく、京都市内から来て、飲食のパートで働いていたときや、習い事などで、自分の子どもの周りのいろんな子どもたちを見ていると、先ほど言われたように、受け身というかすごく消極的で、手を挙げて発言できる子どもさんがすごく少ないというイメージはあります。でも多分SNS とかの発信力とかは結構持っていると思うんです。私も仕事でそういうお話をさせてもらうんですけど、このように人がいる前で発言したり何かをしてくださいって言ったらできないけれども、画面を通してだったらできる子どもがたくさんいるというのをすごく感じていて、今日もちょっとお話してきたんですけど実際それは同じことをしてるんだよっていうんですけど、なかなかそこが結びついてないっていう子どもさんがすごく今の時代的にも多くて、なのでそれをもうちょっと発言力が上がる機会をたくさん作るとか、

なんかそういうのがあって、そういうことができるようになるともっとこう積極的にいろんなことに手を挙げて、自分がしようというふうになる子どもに育つのかなというふうなことも考えたりしました。

座　　長：ありがとうございました。今の子どもたちの様子なんかもお話いただきましたけれども、学校教育現場におられる方として、どんなふうに話を聞かれるかもちょっとお聞きしたいので、今度委員はどんなふうに聞かれましたでしょうか。

委　　員：大宮中学校の時に、丹後学の立志式、3年生が福祉体験をさせていただくにあたって、櫛田さんに来ていただいて講演いただいたんですが、与えていただいたテーマをもとに、自分たちが体験したことを、自分のこれからの生き方につなげて、そして立志式で志を立てて皆の前で発表する。その時は櫛田さんに来ていただいて、発表する生徒に助言やアドバイスをいただいたという経験があって、大変お世話になりました。子どもたちは、そういう丹後学を通して体験をして、自分なりに考えて、豊かな考えを持ったり、思いを集めたりするわけですけども、櫛田さんの話を聞いていて本当につくづく反省するのは、さっき言われた受動的なんですけども、ものすごく良い体験をさせてもらったことは、実感として感じるんですけども、そうから先自分はどうしていくのか、どう変えていくのかっていうところが、なかなか繋げていけない。そこの部分の指導の不十分さを感じておったところです。そういうところでは、体験のフィールドを広げるという表現をされたんですけども、是非やっぱり色んな試験がある京丹後の中で体験するような機会が、さらに充実すればなと思います。なかなか学校から企業さんに繋いでいくところは難しさがあるので、学校のニーズを受けて、丹後機械工業組合さんのものづくりのような形で繋げていただけるような、何かそこにいろいろと学校のニーズを相談できるような場がさらに広がっていくと、学校現場としてはありがたいなということを感じました。

座　　長：ありがとうございました。高校の岡田委員いかがでしょうか。

委　　員：大変熱い講演ありがとうございました。高等学校に向けて、しっかりしてくださいと叱られているような気分で聞いておりましたが、実は産業界との繋がりという部分でいうと、職業系の専門学科、多分たくさんあるんですけど

も、そこと産業界との繋がりというのは結構あると思っています。で結局何かというと、普通科ができていないという部分が一番大きいかなというふうに感じています。ただ普通科はどうしても上級学校に向けた教科科目が、もう本当に 1 時間でも欲しいという中で、授業カリキュラムを組んでいきますと、もう結局余裕がない。放課後は部活動で忙しい。土日も模擬試験等で空き時間がない。もうここに何を新たに入れたらいいのかということで、結局できずに何となく、総合的な探究時間等はあるんですけども、1 週間に 1 回しかない。本当にこれ変わらないなあ、どうしたらいいのかっていう思いがありました。実は先日、京都の先端科学大学に視察に行かせていただく機会がございました。他の大学とは違う、産業界からの要請に応じて、教育カリキュラムを組まれている学校なんですけども非常に参考になることがありました。ちょっと長くなるんですけども紹介しますと、学生の半分は留学生です。40 ヶ国ぐらいから来ているそうなんですけども、大学での講義はオールイングリッシュでされているようです。それに向けて半年間みっちりツールとしての英語の学びをするみたいで、新入生は半年間、1 日 2 コマ英語があるんです。高校の授業に直すと毎日 4 時間いうかなりハードな状況なんですけど、それは要するに、留学生は半年後の 9 月からやってきますので、その時に授業が一緒に受けられるように、またチームでいろんな活動をするので、その時にコミュニケーションができるように。例えば実験実習等も、留学生と一緒に授業するとのことで、そこでコミュニケーションをするためには、英語が使えなくちゃいけないということです。また、キャップストーンプロジェクトという、企業から 1 人指導役の方が来られて、そこに 4 人の学生がついて、そして企業からのお題を 1 年かけて取り組んでいくというプロジェクトをされているということでした。これが非常に学生の主体性やコミュニケーションが育つということでお話があったんですけども、そういう他にはない学びをされていまして、何年か前に、うちの学校の工業科の生徒がそこに入って、工学部で学んでいたんです。そんなに英語が得意な生徒じゃなかったんですが、その生徒に、本校工業科の教員が会って話をした時に、その大学に入ってどうだと聞いたら、高校時代にはなかった自信に満ちた話しぶりで、就職については、国内の企業か海外の企業かどっちに入ろうか迷って

いるというように、海外の企業が国内の企業と同じような選択肢になったということを彼から聞いて、ちょっと衝撃だったと担当の教員は言っていました。そういうふうに考えたときに、高等学校までの学びの中で、本当に生徒に刺さっていくような、やはり自分たちが本当にゼロから積み上げていく、そしてその成果が自信になるというような、そういう学びが何とか入れ込めないかなということを本当に感じました。

座　　長：ありがとうございました。他の委員の方々で何か感想やご質問等ありませんでしょうか。オンラインの方、いかがでしょうか。

委　　員：大変すばらしいご発表ありがとうございます。私も大変勉強になりました。アンケートの方で、日本財団との比較があるものについては、日本全体との比較で高い低いが把握できるのですけど、それがないものについて、例えば丹後地域を「よくできると思う」が「非常に高い」のに対して、今後どうなるかについてが「良くなる」が「非常に低い」という傾向が出て、そうしたことから「主体性がない」ということを導き出されたんだと思うのですが、これはおそらく京丹後市に限ったことではなく、日本の今の若者に多く言えることかなと思いました。

座　　長：ありがとうございました。

委　　員：着目したところは古賀さんと一緒だったんですけど、この数字だけでは、あとは想像しかできないところではあるんですけれど、「地域をより良くできると思う」がこんなにパーセンテージが高いっていうのは、何かものすごく宝であるような気はしておりまして、これは何らかのビジョンであったり、自分の力を発揮することで何らかの変化は起こせると、根拠の程は別としてもそういった確信を持っている、予感を持っているということではないかなと思いました。むしろそれはとても素晴らしいことで、単純にこの質問の日本語だけ見れば自分はできると思うが、丹後地域の将来は変わらないと思う。だとしたら、その要因は自分たち以外にあると思っているのではないか、というような意味も読めるなというふうに思いました。あと古賀さんがおっしゃったとおり、他の全体傾向は、特に他の世界も見てみたいというような意思の表れで、要は町としては好きだけど、他のところも住んでみたいとか、働くんだったら他のところでも働いてみたいという興味は、やっぱり沸くも

のなのかなあというふうに思っておりまして、そういったオプションを、広く持った上で、でもやっぱり自分は京丹後のために働きたいと、そこしか選べないのじゃなくて、選んで働いてくれる、住み続けてくれるっていうようなお子さんをどう育んでいくのかというところがポイントなのかなと思いました。

事　務　局：古賀委員にお伺いしたいんですけれども、京丹後市に限らず、今の若者に多くいるのではないかというようなお話がありましたが、まさに専門職大学で副学長をされていて最近出たデータで、起業数が専門職大学の中でも断トツで一番だったと思います。全国から生徒を受け入れられていて、同じような傾向がある中にあっても、そういったマインドを変えていくといったところはどのような取組をされているのでしょうか。

委　　員：ありがとうございます。私のいる大学は iU 情報経営イノベーション専門職大学という大学ですけど、一番に学生たちに伝えていることとして、全員起業しよう、イノベーションを起こそうといったことを常日頃から学生たちに指導しています。1 年生から 4 年生までイノベーションプロジェクトという一貫した科目があって、その中で新たなビジネスモデルを検討して、各学期の終わりに学年全体で競い合うという取組をしております。それで経済産業省令和４年度 大学発ベンチャーの実態等に関する調査として、大学発ベンチャー増加率（起業の件数の前年比の伸び率）が非常に高く、全国で一番だったということが最近発表されました。確かにそういった起業への取組は非常に熱心に学生たちは行っています。どういった教育を行っているのかというと、イノベーションプロジェクトという科目を通して起業家精神を育んでいます。

座　　長：非常に刺激的なお話もいただいたと思うので、色んなことを皆さんも感じられたかと思います。私自身も色々と考えさせていただきましたけれども、価値観や発想を変えるというのは簡単なことではないですし、おそらく誰かが頑張れば変わるものでもないので、色んな仕掛けを作りながら働きかけていかないといけないんだろうなというふうには思っております。ですので、主体性がないっていうふうに、子どもたちのことをあまり決めつけない方がいいかなと。そういうふうに見えるだけであって、彼らは色んなことを考えている可能性はあります。ですから、そのことをもっと私たちは考えないとい

けないんだろうなというふうに思います。意図を持って教育してもそのとおりにはならない。それぐらいの感覚を持った方がいいし、生徒たちもそう思っているところもあると思いますので、必ずしも教育によってすべてが変わるわけではないので、色んな機会をとらえて、子どもたちに刺激を与えるっていうことを一緒に考えていくことになるかなと思っております。こんなふうに学校にいっぱいメッセージをいただけるのは学校としては非常にありがたいことだと思いながら聞いていましたので、こういう思いをしっかり受けとめて、また生徒たちにも受けとめて欲しいなと感じました。そういったことを実現するプランを作るのがこの検討会の役割だろうと思っております。

探究的な学びのあり方に繋がっていく問題だろうと思いますので、次の議事の方に移りまして、また続けてこの問題について考えていければと思います。

議事の 2 ですが、探究的な学びのあり方についてということで、トロント大学マンク国際研究所准教授で、スカイラボの共同代表でもあります、木島理恵様からご発表をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

木島委員代理： 皆様本日はお招きいただきましてありがとうございます。一般社団法人スカイラボ後トロント大学に現在所属しております木島と申します。本日は、ヤングの代わりに探究型学習について、ご発表させていただきたいと思います。2020 年から始まった京丹後市の SeaLabo プログラムの実施で、京丹後市教育委員会の皆様には大変お世話になっております。松本教育長をはじめ、皆様にいろんなサポートいただきながら、新しい教育のあり方を、京丹後市の子どもたちのために切磋琢磨しながら、これからどういった形で教育を変えていくのかというのを一緒に考えさせていただく機会を頂戴しまして、誠にありがとうございます。

本日は「探究型学習とは？」という、すごく基本的なお話の内容になるとは思うんですが、今までの議論の中でいろんなポイントが出てきたと思うんですね。主体性が育ってないのではないかもしれない、これからの教育がどういった教育であるべきなのか、そういった色んな教育に対する思いというのはすごく熱く皆様お持ちでいらっしゃると思うんですが、今回の発表で具体的にどういうことをしたら、もしかして主体性が持てる生徒さんたちが育成されるのか、というところに着目を置きまして発表内容をさせていただきた

いと思っております。ご質問等ございましたら発表の後に聞いていただければと思います。

では早速、探究型学習とは何なのか。おさらいだとは思うんですが、考え方、定義を明確にして、そのあとにプロセス、こういう内容であればもしかしたら探究型学習のやり方っていうのが学校の教室の中に導入されるんではないかというところから始めさせていただきたいと思います。まず最初に、探究学習とは、与えられた枠組みの中から課題を設定、これは教員の方が課題を設定したり、生徒さん自身が課題を設定したり、やり方はいろいろあると思いますが、その課題について、生徒さんが自ら情報を抽出し、それを整理し、その情報をもとに分析をし、その分析した内容をチームメイトとコラボレーションしながら、解決案や研究内容をまとめていく学習活動のことを指しています。この探究型学習において最も大切なところなんですが、その生徒さんたちが正しい答えを探すのではなく、主体性を持ちながら様々な課題をいろいろな視点から考える力をつけてあげる、これが探究型学習のあり方であるということが一般的に理解されております。ここで、文科省が出版した資料からこの図を持ってきておりますが、こういった、最初にその課題の設定、情報の収集、その情報を整理して分析し、まとめて表現することを繰り返しながら、その内容を極めて良くしていく過程で、最後にまとめた情報を、生徒さんたちがチームとなり発表していくというのが一つの形です。これが探究型学習の一つのあり方なのではないかと文科省が提示しております。またその探究型学習の目的とは何なのか。こちらは大きく二つに分けられると思うんです。まず最初に正解がない複雑な課題に対して、様々な角度から分析を行い、解決案を提示していくというのが一つのプロセスだと思うんですが、例えば地球温暖化。地球温暖化を解決するためには、一つの案では解決できませんよね。いろんなセクター、いろんな考え方、いろんなアプローチを生徒さんたち人間が考えながら、全体的に社会が良くなる、世界の温暖化を阻止していく、改善していくためには色んな角度から物事を考えていかなければいけないという難しい問題を、いろんな視点から取り合って考えながら、プログラムにしていくという考え方もあると思います。ウクライナの戦争もそうですよね。この戦争はどうしてこういうことになってしまったのか、と

いうのを様々な角度から考えながら、ロシアの視点から考える、ウクライナの視点から考える。これを議論し、その分析をし、情報を集めながら、こういうスタンスでこういうことになってしまったということを、生徒さんたちが考えていきながらプログラムを作っていく、発表していく、論文を書いていくっていうのが、その探究型の一つの大きなやり方なんではないかと思います。二つ目のこの学習の目的というのは、考える力の向上です。これにはいくつかの考え方があります。学習者の思考力、こちらは批判的な思考能力、クリティカルシンキングスキルの発展をさせてあげる。情報の信憑性を判断しながら、その情報をもとにこういう分析ができるんではないか、というのを繰り返し作業しながら、クリティカルシンキングスキルを発展させる。これは一つの考え方の向上ですね。あともう１点として、学習者のその分析力を高めてあげる。探究型学習では、データを集め、そのデータを分析し、その証拠に基づいて論理的な結論を導く能力を養うことが大切だと考えております。あともう一つ、学習者の洞察力ですよね。問題解決には洞察力が大変必要であり、異なる視点やアプローチを配慮しながら解決をしていく能力が求められていく。これはまさに、色んな生徒さんたちが持ってくる意見を反映させながら、その洞察力を使いながら、みんなで新しい案を提示していく。これもすごく大切な目的だと思います。今までの議論の中で出てきました、主体性、生徒さんたちの自主性の向上。これは生徒さんの興味であったり、好奇心、この辺りに焦点を置きながら結論を導く自己の学習プロセス、自分がこれだと思う環境を作ってあげる。それが、その生徒さんの主体性が向上させられる、一つの大きな役目を持っているんではないかと思います。この背景には、教員主義の教育から、生徒中心の教育への移行が最も大切なんではないかと考えられています。この流れですが、世界的にも探究学習というものが、色んな国のカリキュラムに取り入れられている。その世界的な流れの中で、日本もこのような流れが、大きくこれからの日本の教育のあり方、ＯＥＣＤ諸国の一員メンバーである日本が、どうしたら教育の改善ができるのかといったときに、この探究型学習というものを導入していくのが一つのやり方なんではないか、というふうに考えている方たちが多くいらっしゃるのではないかと思います。そしてこの探究型学習の学びのプロセスですが、

直線の学びではなく、様々な過程を行ったりきたり、先ほどの文科省が出した図のように、何度もその過程を経験しながら、最終的にこういう学びになるんではないか、こういう学びが大切なのではないかという中で、三つのプロセスがとても大切だと思います。まず一つはコラボレーションですね。その色んな生徒さんたちが持ってくる視点を、一人一人大切にしてあげて、そのチームメイトの意見交換をすることによって、違う意見も聞く。その違う対立する意見を導入しながら、どうすればみんなで、こういった一つの最終的な目標に向かって歩めるのかというのを、生徒さん同士でネゴシエーションしてもらうっていうところだと思うんです。この協力をしながら、でも対立しながら、学習活動を行い、最終的な発表までつなげていくという過程で、とっても大切なのが、コラボレーションのポイントだと思います。二つ目ですが、こちらが皆様がおっしゃっていたとおり主体性のところになると思うんですね。これは英語でラーナーズエージェンシーというふうに呼んでおりますが、その学習者の探究心、自分がすごく興味のあるトピックなので、これを基にみんなで何か最終的に作っていこうという主体性を大切にすることが最も重要なんではないか、じゃあどういうふうにやっていけばいいのかという話になると思いますが、PISA の世界ランキングで上位を実施しているフィンランド、この教育の中でやっぱり探究型学習というのが学校の学びの中ですごく大きく取り入れられているのもあると思います。フィンランドでは何を学ぶかではなく、学び方を学ぶ。そのプロセスをものすごく大切にするんですね。なぜなら学習の方法とプロセスを知っていれば、いつでも何か課題があったときに自ら、これは面白い、ではこれをもとにどういった情報を集め、どういった分析をして、どういった議論をすれば、こういう最終的な案が出てくるのか、というプロセスをフィンランドではものすごく大切にしている。アウトプット重視ではなくプロセス重視ですね。これを探究型学習の学びの中でいかに導入していくのかということが、鍵を握っているんではないかと思います。あとこれはとても大切な点だと思うんですが、先生方が主導権を握るのではなく、先生はあくまでファシリテーターという位置付けをしております。ではどういうふうに先生方がファシリテーターとなるのか、日本の教育の中では、先生が、こういったことを勉強してください、こうい

うふうに学んでくださいっていうのが、生徒さんを中心ではなく先生が内容を提示するというので、今までずっと日本だけではなく色んな国でもそういう学びのあり方があるかと思いますが、探究型学習は、教員があくまでファシリテーターとして適切なサポートをしてあげる、これをどういうふうにしたらいいのかというところで、生徒が興味あるトピックを見つけ、適切な問いを立てる手助けをしてあげることです。その生徒さんたちが学習の方向性を見失わないように、フィードバックや資料の提供などを通して、生徒さんをサポートしてあげる。生徒さんたちが違う方向に行きそうなところを、逆にちょっとこっちに戻ってきてって言いながら、フレームワークの中で色々試してあげる環境を作ってあげるというのがすごく大切になってくると思います。あと生徒さんたちが協力してグループで働く場を提供したり、その探究型活動の進行や監視をする。その監視をする中で個々に生徒さんたちのサポートが必要であれば先生方がしていく。例えばグループ内でうまくいかないグループが出てきたら、先生が中に入りうまく変えてあげることによって、いいサポートができるんではないかと思います。あともう一つすごく大切な点なんですが、生徒さんたちが、そのトピックに対して集中できるような、安全なスペースを作ってあげる。これは研究者たちが使う言葉でセーフスペースというのですが、生徒さんたちがその場にいるときは安心して色んな発言ができる。間違った発言でも、それいいアイデアかもしれないというふうに生徒さんたちが自分で思えるような環境のカルチャーを作ってあげるというのが、教員の大きな役割なんではないかと思います。そこで、こちらの図ですが、従来の教育のあり方、教育の目的は、知識の習得であり、先ほどお話にあった内容で、記憶力を大切にする、検索力、情報を持ってくる、それはすごく大切な能力だと思うんですが、その情報をもとに分析をしたり、批判的に考えたり、これは違う視点があるんではないかというのを、議論できるような場を作ってあげるというのがすごく重要なんではないかと思います。ですので、教員が目指す人間像、これは従来だともしかしてその社会に適応できる人間を育成しなければいけないというふうに教育の一つの目的として成り立っていると思いますが、そうではなく、社会に貢献できたり、社会に変革を起こせる。何かアクションを持てる子どもたちが育っていくんではな

いかというところで、探究型学習プログラムの一つの可能性があるのではないかと思います。そこで、スカイラボが実施しているデザイン思考というアプローチの学習のあり方の中で、これがなぜ探究型学習なのかというふうに簡単にご説明しますと、やはり、1 人が問題を解決するのではなくチームで、色んな生徒さんたちが集まって、その生徒さんたちがいろんな議論をして、色んなアイデアを出しながら、最終的な発表につなげていくというのがすごく大切になってくると思うんですね。もう一つ大切な要素として、色んな情報の集め方があると思うんです。インターネットを通して情報を集める、ChatGPT を使って基礎的な情報を学ぶ、絵本を読んだり、検索をしたり、色んな研究者の論文を読んだりということもできると思いますが、その中で色んな人と話すことによって、また新たな学びができるんではないかというところで、探究型学習を進めるというのは一つのやり方なんではないかと思います。特に中学校、高校生の生徒さんでありますと、リサーチスキル、自分たちで情報を持ってくるスキルっていうのはとても慣れているかもしれない。でもインタビューを通して色んな人に話をするっていうことは、今まであまりやったことがない可能性もありますよね。こういったところで、自ら質問を提示し、そこから色んな情報を集めてくる力を養っていくというのも大切なんではないかと思います。あとはその情報の整理と分析を行いながら最終的な発表につなげていく。色んな人からフィードバックをもらいながら、どんどん改善していく。そのプロセスを何度も繰り返しやっていくというところですよね。これを大切にすることによって、探究型教育プログラムの一環としてデザイン思考が用いられているんだと思います。こちらはデザイン思考のプロセスなんですが、まず最初にフレームワークの設定をしてあげる。これは生徒さんたちが、自分がこの地域の課題を自分たちが自らこうやって勉強したいっていうふうに、生徒さんたちに最初から機会を与えるっていうことも一つのやり方だとは思いますが、これは SDGs、持続可能な開発のあり方ですよね。SDGs を使った、目標を使ったフレームワークを生徒さんたちに提示して、その中から生徒さんたちが自分が面白いというものを選んでもらい、そこからプログラムを実施していくということも一つのやり方かなと思います。先ほどキャップストーンのお話があったと思うんですが、これは例

えば私が今所属しておりますトロント大学の修士課程にいる生徒さんたちが、キャップストーンプログラムというものを、企業と一緒にタイアップをしながら、企業が何を求めているのかというのを SDGs のフレームワークを使いながら案を提示していく案件がございますが、これと本当に似通っているんではないかなと思います。ですので、デザイン思考だけではなくキャップストーンを実施しながら、生徒さんたちが実際にある問題に対して案を提示していく、これはすごく大切な学びのあり方で、カナダやアメリカでは、そういったプログラムに、生徒さんたちは食いつきやすいというか、実際に経験を積むことによって、企業で働きたいときにその経験が直結する。これを中学高校の時から何度も繰り返すことによって、卒業した時に企業ですぐ働けるような、団体ですぐ働けるような人材に育成されるんではないかというところで、一つ可能性としてはあるんではないかなと思います。こちらは写真なんですが、色んなニーズを把握したり、アクティブに生徒さんたちが主体性を持ちながら、これは別に生徒さんたちに主体性を持ってやってくださいって言っているのではなく、自然にこの枠組みでこういうことをしなければいけないんですよって言った時に、生徒さんたちは、これをやらなければいけない、自分で案を出さなきゃいけない、人に話さないといけない時は自分で質問を考えなければいけない。そういった状況に置かれると生徒さんたちもやらなければいけないんだっていう認識が高まりますよね。そういった機会を作ってあげるのはすごく大切なんではないかなと思います。分析の仕方というところも生徒さんたちがいかにその情報を収集して、それをいかに分析しやすい環境を作ってあげるのかというのも、その教員がうまくファシリテーションができたら、あとは生徒さんたちが上手にやっていけるんではないかなと思います。最終的にこういった内容を、生徒さんたちが皆さんに発表することによって、自分たちが考えた案が誰かに響くかもしれない、その響いた内容に対して、生徒さんたちが受けるフィードバックっていうのがすごく大切な過程だと思うんですね。学んだものを自分たちでキープするのではなく、ここで 1 回みんなに発表して聞いてもらおうと。聞いてもらうことによってその生徒さんたちがすごくバリデーションを受けるんですよね。あの発表はすごく面白かった、この発表は何でこういうことをしたんですか、ど

うしてこういう案が出たんですか、どういう議論があったのか、そのプロセスに焦点を置いた質問してあげると、生徒さんたちは自然に、こういう内容で、こういうところで議論があったけど、こういう最終的な決断にグループでたどり着きましたと話せるんです。これは本当にその生徒さんたちが主体性を持って学べたからこそ発表ができる、質疑応答ができる。というところまで持っていけたら、きっと生徒さんたちも皆とても実りの多い学習環境に置かれるんではないかと思います。これで終了させていただきたいと思いますが、ご質問等ございましたらよろしくお願いします。

座　　長：どうもありがとうございました。では、ご質問等ございませんか。感想でも良いかと思いますが、いかがでしょうか。

委　　員：木島さんありがとうございました。大きな趣旨には100%同意といいますか、弊社の方はそれをアントレプレナーシップのプログラムでやっていますけれども、デザイン思考であったり、そういったことと軌を一にするプログラムであるなというふうに思っております。SDGsと紐づけるというところがあったんですけれども、弊社アントレプレナーシップのプログラムを組むときには、SDGsを参照しつつも、時々迷うことがありまして、そこを質問したいんですけれども、SDGsは本当はブレイクダウンしていけば非常に身近なところまで降りていく課題の体系ではあると思うんですが、ややちょっと大きいといいますか、生徒さんのこの身近な問題と紐づけるところが、少し補足をしたりとか、或いはどこかで紐づけの誘導した方が、やはり生徒さんの身体感覚には近くなっていって、納得度が高くなるのかなと思ったりしているんですけれど。何かそこのお題の設定の時に、SDGsを紹介しつつも、生徒さんの身体感覚を近くできるような工夫とかって何かされていたりしますでしょうか。（長井委員）

木島委員代理：SDGs というのは枠がすごく広いものなので、何でも SDGs の中に取り入れられるっていうのが一つの利点だと思うんです。なので、色んな大学、企業、教育団体の中でまず最初にSDGsを持ってくるっていうのは、グローバルな視点で、何かをやっているという一つのインビテーションになりますよね。なので皆さん使っていらっしゃるんではないかなと思いますが、それをいかにローカルにつなげていくのかっていったときに、大きな枠組みを理解するの

と、ローカルな枠組みを理解するのと、この二つの別の作業を並行しながらやっていくというのが大切なんではないかなと思います。で、どこかでそれをつなげてあげる作業が、これはそのグループによって、いつどの過程で繋がるのかっていうのは変わってくると思うんです。生徒さんたちがどういうふうに落とし込んでいくかというところですよね。ですのでこれが、そのチームのダイナミックであったり、もしかしてそのチームの中でSDGsの教育であり、私たちのプログラムはもしかして高等教育をどういうふうに変えていかなければいけない、日本の大学はどういうふうに変わっていかなければいけないのかという課題のところで、生徒さんに実際にそれを議論してもらって、どうしてこれが繋がるんではないかっていうのを話し合ってもらったり、あとはインフォーマルな形でアイディアを出していく、こういうことをすれば、そのグローバルのところとローカルのところが少し合致していく。これはちょっと時間がかかるチームと、すんなりいくチームと出てくると思うんですね。ここら辺は先生方、メンターの方だったりファシリテーターの方が、いかにそれをサポートしてあげるかというのが一つの鍵なんではないかなと思います。

委　　員：ありがとうございます。そこもまさしくそのファシリテーターとしての、前に立つ者のマインドセットといいますかスキルといいますか、そういったところが必要だというところに繋がってくるということかなと今思いました。

委　　員：先生ありがとうございました。探究型の学習の流れの中で、フィンランド教育の話が出て、私もちょっと懐かしく思い出したんですけれど、20年ぐらい前にフランクフルトの駐在員をやっていたときに、フィンランド教育についての調査をしたことがありまして、あの時私はノキアの本社のあるエスポーに行って、エスポーの中学校の調査をさせてもらって、本当に感銘を受けたのです。フィンランドの教育改革の始まりは、もともとはソ連が崩壊して、最大の貿易相手国が一夜にしていなくなった時期に遡ります。フィンランド自体がもう立ち行かなくなるという国難の危機の中で、人材教育にとにかく尽力しようという国を挙げての教育改革が、フィンランド教育の背景にあるという理解をさせていただきました。そうした中で、今もお話がありましたが、教師の役割なんですけれども、実はフィンランド教育で私が一番注目し

たのは、チームを組むのはもちろん生徒さんも組みますが、先生もチームを組んでいるんですね。専門分野を持つ先生たちが、単に自分の専門知識のところを教えるだけじゃなくて、チームを組んで、むしろ科目を融合させるような形で、様々な学びをファシリテートしていくための体制を作っている。そのために校長先生が、そのカリキュラム編成に相当の自由裁量を与えているというのが一つの特徴だったと思うんですね。その辺についてもう少しお話をしていただければと思うのですが、いかがでしょうか。

木島委員代理：ありがとうございます。フィンランドは本当にロールモデルという内容で、OECD の PISA の結果でもいつも上位であったり、フィンランド教育では先生方がものすごく権利を持っている。今おっしゃってくださったとおり、その先生方が持っている主体性っていうのはすごく高いものを持っていて、先生方が自分がこういう理由でこういうことをしたいからというのを理論づけながら教えている。マスターを持っていたり PAC を持っている先生方が学校の先生になるので、学位を持っている人たちだけしか教員になれない、という資格ベースというところもございますが、ものすごい能力を持ってらっしゃる先生方がいらっしゃる。その先生方が主体性を持ち、生徒さんたちに主体性というのはこういうことなんだよっていうのを先生方が経験しているので、それを見せられるというのが一つ大きな要素なんではないかなと思います。フィンランドはちょっと学力が落ちて上がったりというので、フィンランドミラクルはもしかしてなくなってしまったんではないかという議論もございますが、やはり北欧の諸国の中で、フィンランドの地位というのはすごく今までもすごく高いですし、これからも色んな国がフィンランドの教育のあり方を見ているというところでは、今までもこれからも着目すべき国なのではないかと思います。ありがとうございます。

座　　長：今大事な視点があったと思いますけども、生徒たちが主体的になるためには教員が主体的になればならないということ、本当に大きな課題だろうなというふうに思いますがいかがでしょうか。

委　　員：おっしゃること非常によくわかります。もう少し教員に時間的な、また内容的な余裕や自由度があれば、逆に言うと、それぐらい自由度でやっていける教員の専門性であるとかスキルということが求められるとは思うんですけれ

ども、良く悪くも今の教職員は私も入れまして、非常に真面目で、ある程度粒の揃った教員が揃っているんじゃないかなというふうに思いますので、教科の学習については非常に効率が良いとは思うんですけれども、こういう探究的な学びということについては経験もまだありませんし、どうやってやっていけば良いのかというイメージがまだまだこれからかなというふうに思います。

木島委員代理：こちらのイメージなんですが、例えば20分でもいいから生徒さんたちが自分で考えるような一つのアクティビティーをみんなでやってみる。じゃあどういうカリキュラムを作っていかなければいけないのかというところから始まっていくとは思うんですが、何か小さいことでやってみて、それで上手くいったらそれを少し長めに次回はやってみるという時間が設けられるのか、それがやっぱり、色んなカリキュラムを毎日毎日こなしていくので、その余裕が全然ないということであれば、どういった形でその小さいところから変化を持たせられるのかっていうところに着目しながら、小さな変化を少しずつやっていく、これも一つのやり方なのかなと思ったりもしますがいかがでしょうか。

座　　長：試行錯誤していくことになるかなと思いますけれども、多分、目的のところにあった、正解がないっていう問題に取り組む。それに先生が耐えられるかどうかだと思います。先生が授業するときに、正解のない授業をするっていうことが怖いんじゃないかな。多分、正解を持っているから、生徒の前に立てるっていう安心感があるんじゃないかなと。それは私自身もそういうことを経験してきましたし、教師の性だと思うので、そこに先生方が慣れるっていうこと、間違ってもいいんだというところを先生たちも意識するということが、本当に大事じゃないかなというふうに思っています。先生が、知らないっていうことを子ども達の前で本当にどこまでいえるんだろうか、生徒たちから、先生が何でも知っていると思われないといけない、というのがどこかあるんじゃないかなと思うので、多分、若い頃っていうのは質問されて答えられないっていうことの恐怖を感じながら教壇に立つというのは、みんな教師はやっていると思うんですけど、そういうものをもっと積極的にやろうと思ったら、そういう耐える力も必要なのかな、一緒に考えるということを

生徒たちと一緒にやっていくっていう発想を持つということがこれから必要じゃないかなというふうには思っています。

委　　員：先ほどの時もお話しましたが、私どもの大学ではイノベーションプロジェクトという、カリキュラムの中心をなす科目があって、そこでビジネスプランをグループで考案してそれをプレゼンしたりするのですけど、そうした取組みを「デザイン思考」を用いて行っています。イノベーションプロジェクトの科目開始時に、教員が「デザイン思考」の解説をして、学生たちは、その考え方に従って、個々にビジネスモデルを考案し、メンバー間でモデルを共有し、プロトタイプを作成するといった一連のサイクルをぐるぐる回ます。さらに、そこから実際に会社を起こすというところに行くためには、プロトタイプを磨き上げる、アクセラレーター支援をして、それで実際起業に結びつけています。

1 学年 200 人ぐらいいて、40 人クラスで 5 クラスできているんですけど、そこに違った教員が張り付いて、毎学期ごとにそのビジネスモデルを競い合わせているんですが、最終的にグランプリを獲得するクラスは、同じ教員のところに大体集中しているというのが傾向としてあって、それはその教員のファシリテーション能力なんじゃないかっていうふうに私は考えています。今後、「教員が教えることを主にしていた教育」から、「生徒が主体的に学ぶ教育へ」と転換していくために教員はファシリテーターに徹するということですね。そのファシリテーション能力をいかに教員が身につけるか、というところに大きな課題があるのではないかと感じがします。その辺はいかがですか。

木島委員代理：あると思います。これはスタンフォード大学教育学部のシェリー・ゴールドマン教授がおっしゃっていたのですが、先生方がいかにうまくファシリテーションをするかについては、先生方が持っているやり方であったり、考え方であったり、どういうふうにしてそのプロセスをたどり終えたことによってこういう結果が出たのかっていうのを先生方で話し合いをすることが大切だと。なので、今の競い合うモデルですと、ファシリテーションの方達は、自然に話をしない環境になってしまってしまいますよね。これを逆に、みんなの底上げができたら、プレゼンがもっと良いものになっていくと思います。

ファシリテーター同士でその情報交換をしていく、これはすごく難しい点だとは思うんですが、とても大切な点だというふうにゴールドマン先生がおっしゃっていたのを今思い出しながらお話をさせていただいています。ですので、そのファシリテーターの方達が、いかにうまくこのノウハウ、知識を共有するのか、これがきっと底上げに繋がっていくと思いますので、もし可能であれば、共有をもっとやっていくことによって、先生方も１人ではなく、みんなが学びながらやっていくんだよってコミュニティを作ってあげるっていうところですよね。これをすることによって、みんなどんなチーム、どのグループにいても、大体同じような感覚でファシリテーションが行われる可能性が、確率が上がっていく。この辺をうまくやっていけば、もっともっと良い案が色んなグループから出てくるのではないかなと今、思っております。

委　　員：高校の教員の皆さんが、ファシリテーション能力を、（すでにあるのかもしれませんが、）どうやってそれを習得していくのかが課題かなと思いました。

木島委員代理：あとは先生方が、すごくファシリテーションが上手な方のクラスを見ることによって、先生方もこういうふうにしたらこういう答えが出てくるかもしれない、この答えをどういうふうに、違う答えがあったときにどういった生徒さんたちが、どういう議論で最終的な決断にいったのかっていうのを分析しながら、理解することによって、きっと先生方も、これならここは自分もできるかもしれない、ちょっとブレイクダウンしてあげるっていうことですよね。色んなファシリテーションのやり方も、型にはめればいくつかにまとまると思うので、それをみんなで議論して、どこは自分ができるかもしれない、こっちはちょっと難しいかもしれないけどここにいた時に、またその経験を積むことによって、もしかしてそのファシリテーションや色んなことができ始める可能性がある。この辺をうまくやっていけば、ファシリテーションが上手な先生方がもっともっと育成されるのではないかなと思います。

座　　長：ありがとうございました。多分、これからの私たちの課題かなと思いますけど、教師のファシリテーションをスキル化してしまうと、少し違ってくるかもしれないので、それは生徒と教師との関係全体としてそれをとらえていくことが大事かなと思います。多分そういう感覚を私たちは身に付けることではないかな。その場がどういう場になったらいい学びになっているのか、お

互い共有し合うことだと思うので、教師がこうやれば必ずこういくっていうことではなくて、相手があって、それに合わせてやっているかどうかっていう関係性でとらえていくっていう視点がとても大事だと思うので。でも苦手だと思うとどうしても教師だけを見て、いろんなうまいやり方を探ろうとされるかと思うんですけども、そうすると失敗する可能性も出てくるかもしれないので関係性としてとらえられるかどうか、そこの方が多分大事なことのような気がしています。どうもありがとうございました。今後の課題になっていくかというふうに思います。

櫛田氏：委員でもないのですがちょっと発言させていただきます。ファシリテーター養成講座っていう研修をやったりしているんですけど、対話の学び直しをしないといけないっていうのをすごく感じています。日本人は対話するのが下手なので、対話を学び直すという機会がやっぱり必要だなというふうに思います。対話の訓練から始めないと難しいんじゃないかなっていうのが一つと、もう一つは、うちも保育園とかやったりしていますけども、子どもの権利というかいわゆる対等な関係性を築くということがとても大事で、絶対子どもをしつけるとかはやらないでくださいっていうんです、それだけで上下の関係が生まれるから。先生と生徒が対等な関係なんだっていう、権利擁護の学びというか、権利を尊重する、その権利擁護の視点を学び始めると、生徒からも教えてもらえるというか、あなたはどうなのとか、何でそうなのとかっていう、問いが先行していくっていう形になってくるので、関わり方が、あなたからも私は学ぶし、私からもあなたに提供できるものはできる、お互い対等な存在ですよっていうのは、正直、中学生高校生だけでなく、幼児からもそういうふうにやり続けていかないといけないと思っているので、その権利を学ぶっていうところと対話の学び直しをするっていうのがとても大事だと思います。そうすると次の良質な問いが生まれてきて、その良質な問いが、多くの人々から良いアイデアを引き出す、ファシリテーションにとっても大事なスキルになってくるんじゃないかなというふうに思っているので、僕ら大人がまず学び直さないと難しいっていうふうに思っています。以上です。

座　　長：どういったことを大切にしていくべきかということを確認できたと思います。木島先生のお話は以上とさせてもらって、この中間まとめのところでもまた

論点になってこようかと思いますので、またそこでご発言いただければというふうに思います。議題の 3、中間まとめに向けた基本的な考え方をまずは事務局からご紹介いただきまして、皆さんからのご意見をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

事　務　局：（事務局より説明）

座　　長：ありがとうございました。今日は詳細なところではなくて、全体の骨子といいますか、内容としてこういう考え方でほぼ中間まとめてきたらどうかというご提案だと思いますので、今日のこの資料にある内容についてのご質問でも結構ですし、もっとこういったことを盛り込むべきじゃないかっていうふうな、そういったご提案、ご意見をいただければというふうに思います。よろしくお願いいたします。

委　　員：参考資料 3 の後ろから 3 ページ目なんですけれど、本日ご欠席の岩本委員提出資料の抜粋があります。中高連携のあり方についてはこの岩本委員の考え方をベースにしていくことができないかなという思いを持っております。ここに書かれているのは新たな制度や取組の提案ではなく、今日までの議論の中で色々な意見が出てきて、それをこういう形で、基本的な考え方をまとめているということでありますので、当然絵にかいた餅ではなく、ちゃんと実効性のあるものに、それも持続可能な継続的なものにしていくことが必要になると思っております。そういった実効性があって持続可能なものにしていくためには、まさにここにも書いてあるようにリソースをどう確保していくかということですね。とりわけ、当然予算がついて裏付けがあることが前提ですけれど、人材の確保ですね。今日も先生方のあり方といいますか、ファシリテーター論が非常に議論されておりましたけれど、いずれにしろ新たな制度や取組をしていくためには、それを担っていく現場の先生方の確保、或いはその環境を整備していく行政側の職員の人材の確保、こういったものが、まさにチーム的な機能を発揮するために必要になってくると思うんですね。人材の確保は、一朝一夕にできるものじゃないと思っていまして、配置をしてじゃあよろしくお願いしてできるなら苦労しないわけで、なるべく早く仕込みといいますか、まさにそういった人材を確保していくための努力を、私はぜひ京丹後市教育委員会はじめ部局の皆さん方によろしくお願いしたい。

その時には当然予算の確保を、その裏付けになるようにしていただきたいということが一つ。もう一つは持続可能性を考えるのであれば、やはり制度的な裏付けが必要になるわけで、そこで岩本委員の発表資料の中にありますように、中高連携の中でいかに京丹後市がその役割を果たしていくかということについては、京丹後市の教育委員会部局においても、もう少し具体的な議論をぜひ展開していただきたい。そして、この検討会の場においてもそういう話を検討いただけるようなものにしていっていただきたいなと思います。岩本委員からの発表資料に書いてあるとおり都道府県、市町村で役割分担を、という考え方は、今の制度の枠内で備えもできるという考え方ですけれど、学校全体をいきなり京丹後市が全部運営できるかどうかいうことは、難しいかもしれない。であるとすれば、例えば学科を運営するという考え方はあるのかな、いうようなことも含めて、この新たな制度、取組の提案を考えることが重要かなと思います。私からは以上です。

座　　長：ありがとうございました。今基本的な考え方２番を中心にお話をいただいて、ご提案いただきましたので、まずこれに関してご意見がありましたら出していただければと思いますがいかがでしょうか。よろしいでしょうか。そうしましたら、今日のところで３番のところは、まだ具体的になくて今日のご意見を踏まえてということでしたので、冒頭でも色々ご意見いただきましたけども、繰り返しでも結構ですので特に３のところで、ぜひ盛り込んで欲しい、盛り込むべきだというふうなご意見がありましたらいただければと思うんですけど。いかがでしょうか。櫛田様、せっかく今日お越しいただいたので、ここの３のところで、こんな意見を書いた方がいいんじゃないかっていうふうな、何かご提案が等ございませんでしょうか。

櫛　田　氏：どんな議論をこれまでされたかよくわかってないんですけども。ありがとうございます。地域産業界との連携っていうところでいくと、して欲しいじゃなくて、どうするべきか、こっちがどうするかっていうこと。先ほど岡田先生からもありましたけど、学校側も頼りたいけどもという思いもある。我々も関わりたいという思いはあるんだけども、学校からのオファーを待っているだけじゃなくて、我々もこんなことできるよっていうのをどんどん発信すべきだと思っています。民間企業が、例えば、うちなんかは韓国の福祉財団と

の交換研修があったりするんですが、そのプログラムの中に高校生の関わりを入れるということを考えたりして、積極的にこちら側からも発信しないといけないっていうのを大前提に行く。でも学校の先生側も何かそういうのがあったらもっと知りたいけど、日々の中でなかなか情報収集できないとかっていうところでいくなら、プラットフォームがあればいいと思いました。ニーズはあるし、こちらも関わりたいと思っているけれどもそこのマッチがなかなかできない。そこを何か繋ぐような仕組みっていうのが一つ考えられないかなあと言うふうには思いました。あと、まずマッチングする仕組みがあれば、生徒たちが、例えばこんなことに興味あるとかやってみたいなと思ったときに、そこを即繋いじゃって話を聞いたり、なんならもうその１人の生徒のためにでも話に行くぐらい、企業は積極的に人材育成にコミットすべきだと思っています。僕はある高校で１人の生徒が福祉に興味があるんで来てくださいって言われて行ったこともあります。実際その子は、結局外に出て、勉強して戻ってきてうちに就職してくれたんですよ。っていう意味では、僕としてはそこの時間が全然無駄ではないなと。そうやってやりたいと思うのをつなぐこと、例えば野球やりたいっていう子にとりあえず野球やらせてみるっていうのと同じで、野球をやる前にまずはちょっとこれ勉強して、ああしてこうして、ってまずやらせるみたいな。それを企業に直つなぐ、その間を繋げられるような仕組みがあったら、すごく良いなというふうに思っています。むしろそれやったら、学校終わってから別に時間を合わせても、うちとその生徒とのやりとりができるわけですから。なんかそういうふうに、やりたいって思ったらすぐ繋がる即実践できるような仕組みが作れたらいいんじゃないかなと思います。

座　　長：ありがとうございます。かなり具体的なご提案をいただきました。マッチングというのは大事な発想だなと思いました。

委　　員：今の櫛田さんの意見に全く同感で、我々も学生さんから何かアピールして欲しいとか、学校からアピールして欲しいと思っている反面、こっちからも投げかけというか、積極的に行動できるような何かないかなって模索はしていたところで、本当にそういうマッチングできるプラットフォームさえあれば、すぐ企業とつなげられるかなと。ＢtoＢは結構多いんですけどそうやって学

生さんだったり、一般の方だったりとかっていう繋がりがなかなかないもので、本当にそういうプラットフォームがあればすごい素晴らしいことだなと思いました。（荻委員）

委　　員：私も同じです。生徒さんたちとコミュニケーションがとれる場所ってなかなかないので、我々の仕事に興味を持ってくれる人と繋がるってことはなかなかなかったので、そういうプラットフォーム的なところがあれば本当に良いと思います。先ほど櫛田さんもおっしゃったように、1 人でもそういう興味を持ってくる人がいれば僕もなんぼでも行きます。やっぱり今反物業界っていうのは人材不足が深刻ですし、そういうことに興味を持ってくれる、ものづくりが好きな子と会話ができるっていう場所は本当にありがたいなと。丹後学もそうですけど、やっぱり丹後愛を育むような、そこでまた我々自分のところの話ができるような場所っていうのがつくれるようになればなと思いますし、とにかく一旦外に出ても、丹後に帰って学んだ事を発揮していただけるような人が 1 人でも増えていくっていうことは、ありがたいですし、頼もしいので、そういうことが繋がるような場所っていうのがあるとありがたいですし、そういう授業とかも含めて、少しでも丹後愛が育てられるような、ツールもあればいいのかなと思います。

座　　長：共通してそういう場を作っていきたいということだと思いますので、是非そういうことも盛り込んできたらいいかなというふうに思います。他にご意見はございませんか。

委　　員：今日の話全体のを聞いて感じたのが、やっぱり大人たちも、学校の先生も含めて、やっぱりカリキュラムとかすごく気にされたり形を大事にされてるなって感じがすごくありまして、ちょっと私の仕事の話になりますが、私は治安を守る職場で働いてまして、例えば不審者の侵入の訓練とかもさせてもらっているんです。実際不審者が入ってきたら、どこからどんなふうに入ってくるかわからないので、正解がないんですけども、やっている学校さんで毎年同じパターンでされるところがありまして、せっかく訓練して反省したんで次は変えましょうって言うんですけども、同じパターンでそれを 2 年目繰り返されるところもあって、私がここ 1、2 年提案させてもらっているのが、生徒さんのいない時間は生徒さんの心的なことを考慮して、あまり騒ぎ立て

ない形だけの訓練がすごく多いので、生徒さんがいない時間、夏休みとかに、先生だけで訓練をしましょうっていうのを提案させていただいたら、今年ある中学校がそれをしたいということで言っていただいて、私も初めてなので学校側と打ち合わせをさしてもらったら、こんなパターンがあるのでこんなパターンをしましょう、こうしましょうってすごく出てきたんです。そこの差が、先生たち大人も考えてするのか、形だけするのかって、本当に違うなっていうことを今すごく実感をしています。なのでやっぱり色々カリキュラムが大変だとか、大学に進学させるための授業が大変だっていうのもわかるんですけど、やっぱり大人が一生懸命考えて、より良くするためにどうしたらいいのか、それプラスやっぱり大人も楽しんで一生懸命やっている様子を見ると、子どもも本当に真剣に取り組めるようになったり、子どもも楽しんで、そういうふうになりたいな、そういう人たちがいる地域に自分も住みたいなとか、ここで働きたいねっていう気持ちになるんじゃないかなあということを、今日はすごく感じました。

座　　長：ありがとうございます。非常にいい例を出していただきました。学校でよくありがちなことですので、カリキュラムとしてやらないといけないとなると、形骸化してしまうところがあると思うので、そこをどんなふうにしていくかという課題だろうなと思いました。今のお話いただいたことは、１の教育内容もかかるところだと思いますので、教育内容等に係る考え方が１番のところでのご意見いただきたいと思うんですけども、いかがでしょうか。

委　　員：内容についての教育だけではなく、方法についての教育も行っていき、また探究に取り組む。特に１番に力強く書かれているんですけれども、ゆとり教育でも同じようなことが言われて、いくつか問題点があったと今整理されていると認識しております。一番のポイントだったのは、いわゆる詰め込み型の日本型の受験というか、学力の低下っていうところが結果として短期的には出てきてしまって、揺り戻しみたいなところがあったのかなと思っております。過去の経験を踏まえると、こういった探究型の学習に時間をたくさん入って割いていくと１番に書いてありますけれども、いわゆる従来型の知識詰め込み型の教育から脱却をするんだという、裏を返せば、短期的には記憶をベースとした学習のパフォーマンスってのは出なくなるっていうことが予

想されるかと思うんですね。そういった部分を、成績落ちますと書くとちょっと反論も多いかと思うんですけれども、いわゆる詰め込み型の知識型の教育から脱却するんだっていうことを、しっかりと１番で謳う必要があるのかなというのをちょっと、このお話をさっき聞きながら思っておりました。

座　　長：ありがとうございました。教育の考え方を変えないといけないっていうところのご意見をいただきました。ほかの委員の方いかがでしょうか。

委　　員：１番でSeaLaboは、これは本当に良かったっていう実感がありますんで、1人でもここで学ぶ生徒さんが増えてくると、随分変わってくるなと思うので、ここは相当期待しているところでもあります。さきほどの委員の話じゃないですが、今日本で言えば大学入ればもうそこで終わりみたいなところがあって、高校なんかもやっぱり入試のための勉強という形で、つい先ほども詰め込み型っていうお話があったと思うんですけど、なかなか中高とか教育も変わっていけないのかなって思うところもあって。やっぱり入試ありきのこのシステムっていうのがあんまりよろしくないのかなというふうには常々思っています。

座　　長：そこは昔から言われていることですけども、大学から変わっていかなきゃいけないっていうのはすごく感じているところであります。

委　　員：ありがとうございます。どうすれば変えていけるかということなんですけれども、極端な話をすると、出口がうまくいくモデルがあれば、ちょっと変わってくるのかなというふうに思いまして、先日視察に行かせていただいた若狭高校が、そういうところがあると思うんですけども、探究的な学びをして、そして選抜等で従来型の学力的な入試以外の部分を活用しながら大学に進学をしていく。で、大学に入ると、もしかするとそういう学力的な選抜で入った学生さんよりも力、能力を発揮するというような、すべてがそれにはならないにしても、そういう一部成功例を作っていくということは大事かなというふうに思います。先ほどから普通科の話をしているんですけども、これは私の私見ですし、全然できるかどうかわかんないんですけども、1年通してのそういう探究的な学びの時間というのをたくさん取ることは難しいかもしれないんですけども、期間限定的なものを少し入れて、集中的にやってみるとか、全員の生徒ではなくても一部の生徒、先ほどの京丹後SeaLaboの取組に

もあったと思うんですけども、そういったものが期間限定的な部分で中に入れていければ、面白い学びを提供できるのではないかなというふうに感じます。あと中高の連携の部分でいけば、高等学校だけ単独ではなくて、何か中学校の時にされた、これは全員でなくてもいいんですけども、それがまた継続して京丹後の学校の中で協力してやっていけると、こういうような中高の連携ができると本当にいいものができないかなという感じがします。

委　　員：基本的には皆さんのご意見、全く賛成でございまして、特に教育の内容については、これまで取り組まれてきた SeaLabo の STEAM 教育を基礎に置いて、さらに発展させるっていうこと、それが一番、確実な内容が組み立てられるんじゃないかなというふうに思っております。あと 3 番目のところの地域、産業界との連携に係る考え方のところでは、前回お話が出たコーディネーターの存在が、私は人に関するところでそれがすごく大事かなと思って、是非そういったことを盛り込んでいただければというふうに思います。以上です。

委　　員：今までの皆様のご意見は賛成した上で、実は弊社、ぎりぎりまだお名前出せないんですけど、ある自治体さんとやろうとしていることがありまして、それがいわゆる環境整備、この１番の最後に書いてあるところに少しあるかなと思って協議させていただくんですが、メタバース部っていうものを作ろうという、ある市の企画です。ここで今、なぜこれを紹介するかとしましては、3 番と繋がるんですけれども。いかにその探究学習をするときに、先ほど櫛田さんにもすごい熱いメッセージをいただきましたけれども、実はお手伝いしたいみたいな産業界の方々と、いかに繋がっていくかという話で、その取りまとめには今古賀さんがおっしゃったようなコーディネーターの存在が不可欠だと思うんですが、生徒さんが、学びたい、話を聞いてみたいといった時に、本当に産業界の方が飛んでいって、学校にお邪魔するということもあっていいと思うんですがネットワークを使えたらそれも良いのではないかと。メタバースの話は、実はこれは放課後の部活時間で行う探究学習の話ではあるんですけれども、同じようなネットワークも含めた、ＩＴ的なネットワークを含めた環境整備みたいなことが、新しい角度からちょっとトライできると面白いのかなと思いました。いかに軽やかに、教育現場と一緒に生徒さん

たちと、地域の大人の皆さん、産業界の皆さんと繋がるかというところで、ちょっと部活化するのかどうかは別として、コンタクトがすぐに取れる、気になった時に話ができるといったような、或いは探究活動にヒントをくれる、もしかしたらもっと突っ込んでいけば、一緒のプロジェクトができるですとか、そういった環境を作るというようなことを盛り込めたら、非常に全国的にも先進的かなというふうに思いました。すいませんこのタイミングでいうことじゃないかもしれませんが、ちょっと環境づくり、弊社の講演させていただいた時も、教育は最終的に環境になるというのは弊社の考え方なので、その環境といったところで何か一歩手を打てればなと思った次第です。あくまでご参考ですが、以上です。）

座　　長:ありがとうございました。環境整備は、1の中に書かれていることですけども、当然地域との連携の中で、それが可能な環境整備っていうことも入ってくるので、そういう視点をいただいたかなというふうに思います。

委　　員: 環境整備に関連するところなんですけれども、私、文部科学省のリーディングDX事業で、京丹後市の学校といくつか関わりを持たせていただいているんですけれども、学校現場がもう少しクラウドと親和性の高い環境で、学校それぞれのニーズに合わせて、もう少ししっかり環境整備に力を入れていかれると良いんじゃないかなと思っています。具体的にはGIGAスクール構想で最低限というか一とおりの環境は用意されていると思うんですけれども、民間企業と接続するにしても、学校の中で探究的な学びを進めていくにしても、もっとクラウドが簡単に使えるというか、しっかり使えるような環境整備っていうのが必要になってくるかなというふうに感じていまして、これひょっとしたら学校ごとで少し水が変わってくるかもしれないので、学校のクラウドに接続する環境を中心とした環境整備に力を入れるっていうようなところも、ここに書き込まれてはいかがかなというふうに思っております。お願いします。

座　　長：ありがとうございました。環境整備のところに具体的な案をいただいたかというふうに思います。

木島委員代理：何をしたら一番、教育のあり方であったり学びの環境をつくれるのかと考えた時に、やはり先生方と生徒さんの対話になってくると思うんです。これ本

当に大切ですよね。先生方を信頼する生徒さんたちがいるからこそ、やっぱり素晴らしい学びが可能になってくる。その信頼性っていうところを大切にするのであればやはり、教員に対する負担をなるべく増やさないような形で、色んな改革ができたらすごく良いかなと思うんですが、やはり先生方の声であったり、先生方が毎日何を感じて、京丹後市の教育をもっともっと良いものにしていきたいと思われているのか、そこの原点を忘れずに、STEAM教育、デザイン思考と新しい形が色んな形で入ってくると思いますが、これを落とし込むためには先生方とのパートナーシップが一番大切になってくると思うんですね。なので,この辺を忘れず私も、今お話を皆さんの話を伺いながら感じるところが、その点かなあと思いますので、ぜひ皆様とまた、これから色々こう議論をしながら、先生のサポートをいかにしていくのかって言う案を出していけたらいいかなと思っておりますので、ぜひ引き続きよろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。(木島先生)

座　　長：ありがとうございました。学校の先生方、もう少し安心して働けるようにすることが大事かなと思いますけれども、私も大学院で現場の先生方に言っているのは、それを自分たちでも獲得しないといけないと。与えられるものではないっていうことは言っていますんで、少し酷な言い方になるかもしれませんけれども、自分たちで安心できる場所を勝ち取るんだっていうふうな発想や力も持って欲しいなというふうに思っています。そのためには、教育委員会等にもっと考えて欲しいなと思うとこありますけど、その辺の環境整備はしていただきたいなというふうに思うところではあります。最後、教育長、何か感想がありましたら頂けるとありがたいです。

教　育　長：本当に多くの委員の皆さんからご意見をいただいて、一つ一つごもっともだというところもあります。全てを盛り込んで網羅的になってしまって、どれもできないというのではなくて、今聞かしていただいた中から、京丹後市としてより効果があるとか、より子どもたちにとって重要だというところを、さらに吟味して絞り込ませて貰いながら、最終的にまとめていけたらというふうに思っております。先ほど玉井委員からもありましたように、京丹後シーラボについては3年間ということで、スカイラボと一緒にということで今年が2年目で、来年もまた続けてやらせていただいて、そうした学びを最終

的には京丹後市で自走できるような、そういう教育課程外のプログラムとして続けていけたらと思っていますし、そうした探究的な学びについての部分は、丹後学や総合的な学習という学びの中、教育課程の中にも当然取り入れて、これは日本語ベースで、どの子もそういう力をつけていけるようにというところについては、何とか進めていけたらというふうに思っています。あとポイントとなるのは、総合的な学習の力だけでその力がつくのかというとそうではないというふうに思いますので、教科の中で、高校にもいろいろな教科の中に教科の探究という時教科関係の時間がとられているように、小中学校においても、先ほど詰め込み型から脱却という言葉を入れたらどうかという話がありましたけれども、具体的に教科の中の学びとして探究的にしていくんだっていうところを、はっきりと明言できて打ち出せるような基本的なところを求めていけたらというふうに思っています。

座　　長:ありがとうございました。非常に力強いお言葉、決意表明をいただきました。委員の皆様からいただいたご意見をしっかりと受けとめていただいたなというふうに思っております。本日は長時間にわたりまして貴重なご意見をいただきありがとうございます。また、ご発表いただきました櫛田さん、木島さん本当に今日はありがとうございました。では今後のスケジュール資料を用意していただいていますので、事務局の方からご説明をお願いします。

事　務　局：（事務局より報告）

座　　長：ありがとうございました。では以上をもちまして本日の会議を終わりたいと思います。

濱 副 市 長： すいません。別件になるんですけれども1点だけ、最後、参考資料4を今日お配りしていまして、これは時間がある時にぜひ見ていただければなと思いますが、NPO法人Waffleというところから先日市民、子どもたちを含めて講演をしていただきました。その内容としましては、ジェンダーギャップを教育界でなくして、ＩＴ系ですとかデジタル人材を、やはり日本で増やしていかないといけないという問題意識を持っている内容でした。講演者は斎藤さんという方で、フォースジャパンの世界を変える30歳未満の30人受賞された、非常に活躍されている女性の方で、聞いていただいた市民の方々も非常に興味を持って、かつ刺激を受けていただいたかなと思います。なぜ今日配

ったのかと申しますと、今日の議論の中でもありましたように、先生方は今まで教えるっていうのが当たり前っていうところからファシリテーターという役目はやっぱり必要ですよねと、なので今まで当たり前だったことから脱却して、色んな物事の見方を持ちながら変わっていかないといけないっていう議論があったかなと思います。まさにこのジェンダーでも同じようなことを言われていまして、今の社会の構成っていうのが、ある画一的な象徴的なもので作られているという当たり前を、無意識になっている部分を意識的にして、ジェンダーで違いないかっていうところを意識的にして変えていかなければいけないですとか、そういったところを大きなヒントになるんじゃないかなと思いまして、人材育成だけではなく、今回皆さんもちょっとした参考になればいいなと思ってお配りしていますので、是非お時間のある時に見ていただければと思います。ご紹介までです。

事　務　局：事務局の方にマイクをお返しいただきました。竺沙座長、本日も進行をありがとうございました。また櫛田さんと木島さんにおかれましても大変お忙しい中貴重な発表をいただきました。お陰様で議論が深まりましたし、今後のまとめについての方向性が見えてきたかなというふうに思います。それでは以上をもちまして第 3 回京丹後市の新たな教育人材育成のあり方に関する検討会を終了したいと思います。委員の皆様本日は大変お世話になりましてありがとうございました。